

と誓いました。そして家が料理屋でしたから私は料理人として手伝いをするのが出来ました。ビルマで戦死した思いで家業の振興と祖国の再建に徹力を尽しました。

二年前、京都にビルマの舞踊団が来ましたので、せめても戦時中のことをお詫びしたいと思い、ビルマの若い人達に「戦争中ビルマの人達に大変ご迷惑をおかけしました」と申しました。年齢的にご理解頂けたかどうか分かりませんが、長い間の胸のしこりが流れたようでほっとしました。それにつけても無茶なビルマの戦争で、まさに「ああビルマ戦の悲劇」であったと、返す返すも残念に思います。

## 大東亜戦争従軍記

愛媛県 八和田 勲

私は大正七（一九一八）年生れです。当時は男子二十歳になりますと徴兵検査を受けなければなりませんでした。私は第一乙種合格でした。甲種合格は現役兵として入隊、二年間の軍隊教育を受けるのです。当時は国民すべてに課せられた義務でした。私は第一乙種合格ですから現役兵としての入隊の義務はありませんが第一補充兵として臨時教育召集を受け、昭和十四（一九三九）年三月八日輜重兵として第十一連隊に入隊、初めて軍人生活を体験する毎日が始まりました。

初めは基本的な徒歩教練や集団の行動等でした。朝の起床ラッパから夜の消灯ラッパまでの時間が長く感じられ、一日の時間を過ごすのも大変でした。規則正しい型にはまった毎日の教育は初めて体験することばかりです。何事も班の全員が出来

なければならず、一人でも出来ない者がいると全  
体責任で「ビンタ」をもらいます。こんなことは  
度々でした。しかし軍隊では上官の命令に反する  
ことは出来ません。一方通行です。くやしくても  
我慢するしかありません。兵器の使用法、手入れ  
の仕方、射撃の操作等すべてのことが初めて体験  
することばかりで、なかなか思うようにはゆきま  
せん。

ある日初めて兵舎外へ行くといわれて出発しま  
した。行くうちに途中で足にまめが出来て痛くて  
たまりません。その豆が今度は裂け痛むのです。  
それでも人に遅れないように我慢して歩きました。  
今度は左足にも豆が出来痛むのです。それでも人  
に遅れないように我慢して歩きましたが遅れて、  
近くで指導していた上等兵に見つかって叱られま  
した。「早く行け」とどなられてビンタを二つほど  
もらいました。

その時小休止の号令が出ました。やれ嬉しやと  
ばかり靴を脱いで豆の手当てをしている時に上等

兵がそばに来て言いました。「お前達その豆がさ  
けて固まって、また他の場所に豆が出来る。その  
繰り返して豆が出来なくなったら一人前だ」とい  
われました。

地方では足に合わせて靴を買い求めるが、軍隊  
では支給された靴に足を合わせて行くんだと教え  
られ「お前達は豆を作るために今日このように行  
軍しているんだから、しっかりと豆を作れ」とい  
われました。軍隊では理屈は通用しません。不言  
実行、黙々と忠実に何事も実行する人が賢いので  
す。

私は入隊後いまだに未知のことが多く、よく分  
かりませんが、とにかく一カ月間の教育期間満了  
により昭和十四年四月八日召集解除になり、健康  
で大きな事故もなく除隊することが出来て、まず  
一安心しました。この時私は二十二歳と八カ月で  
した。

この教育期間のことを振り返って見ますと学ん  
だ事も多かった中でとくに感じたことは何事も何

日までと時間を定められると、一生懸命に努力する。例えば「軍人勅諭」を覚えることもそうであるが、出来なければビンタでひどい目に遭うので必死の思いで頑張るとそれができる。つまり人は土俵際に追い込まれた時全力投球で全う出来ることを身を持って体験出来たことです。そしてこの一カ月間に「ビンタ」の数多くもらいました。

臨時召集の除隊から二カ月後の昭和十四年六月五日、臨時召集令状が来ました。その時は九州の八幡製鉄所に勤務しており、姉の家に下宿して、小倉工業学校の夜間部に通学していました。令状の知らせを受けたのは学校で授業中の夜八時ごろのことでした。早速、先生や生徒に挨拶をして、急いで姉の家に帰りました。姉の話しによると入隊日時を考えると今夜の最終列車に乗らないと入隊日の時刻に遅れるということでした。私に見れば急な出来事です。身回りの事や職場や友人関係などいろいろ気になることもありましたが、入隊日時の厳守もしなければなりませんので

大急ぎで帰省の支度をしてその夜の最終列車に乗り込みました。その夜は体の疲れ、精神面での疲れなどがあってなかなか眠れませんでした。

六月五日朝、大三島井口港に到着しました。当時の二本松港ですが、上陸すると回漕店、現在の港務所に父母たち親戚の人や青年団、婦人会など大勢の方々が出迎えにきていました。父母の話では、もう家に帰る時間がないから用意してきたお弁当をここで食べて、自転車で宮浦の大三島神社に参拝、祈願して来なさいということで、大急ぎで神社に参拝を済ませました。

回漕店へ帰ると、各種団体の皆さんや小学校の生徒さんたちが多勢見送りに来てくれました。やがて今治行きの船が来て見送りの皆様に挨拶を済ませて乗船したのでした。客船は別れを惜しむかのように港内を三回も回ってくれました。お見送りの皆様も、そして私達も、見えなくなるまで手を振っていました。この時の感動は今もなお頭の中に焼き付いています。そして丸亀歩兵第十二

連隊第三中隊に入隊しました。

約一週間は外地へ出発の準備をしました。同年六月十二日、外地部隊へ転属のため坂出港から軍用船で一路支那に向いました。約十日間の船での生活を終え、六月二十二日に北支の太沽に到着しました。上陸後、準備されていたトラックで出発しました。

天津も近く、初めて見る異国の地でした。住民の姿、立ち並ぶ立木や家屋、みな珍しい物ばかりです。トラックは天津市内を通り六月二十五日付で転属になった第二十七師団兵器勤務隊に配属されました。当時兵器勤務隊は天津に駐屯しており、その日から勤務が始まりました。

毎日いろいろな教育を受けましたが主として兵器の修理を目的とした専門的な教育でした。兵器の種類は歩兵の使用するすべての兵器です。三八式歩兵銃、軍刀、甲乙各種拳銃、十一年式軽機関銃、チェコ式軽機関銃、九二式重機関銃、八九式重機関銃、擲弾筒それに歩兵砲でした。これらの

各種兵器の構造、原理、分解、結合及び組み立て、修理など毎日毎日必要な技術教育を受けました。実習で修理が終わると実弾による試射も行います。

このような毎日でしたが、やがて一年が過ぎようやく一人前の修理が出来るようになりました。新品の取り替えも上官から任されるようになり、自信がついてきました。分隊中でも上達が一番早いといわれ、上官からも初めて誉めてもらいました。

こうして一年が過ぎますと、トラック十台ぐらいの編成で兵器修理班を前線に出動させるのです。私達の修理班の来るのを待っていて、私達が到着すると非常に喜び故障兵器を沢山修理に出してくれました。一部隊で一週間ぐらいの予定で、次々と部隊を移動しながら兵器修理の任務を遂行して行きます。こうして私達は各部隊の移動修理を終えますと元の駐屯地である天津に帰隊します。こんな毎日の繰り返しでしたが、時には病氣もしました。でも命取りとなるような大きな事故もなく

毎日元気で勤務することが出来て本当に幸せだと思っております。神様が守って下さったのでしよう。

いつの間にか月日は流れて、昭和十七年六月二十一日付けで陸軍伍長に任官しました。分隊では一番早い昇格でした。そしていよいよ内地に帰れる日が近づいて来ました。昭和十七年六月二十一日、内地への帰還命令が出たのです。すぐに内地帰還のために天津を出発、陸路で釜山へ向いました。

六月二十四日山海関通過、六月二十九日釜山到着、九日間の列車の中はぎっしりと詰まり、食事も満足に出来ない状態で、皆弱り青ざめて見る姿はありませんでしたが私は元気でした。七月一日、釜山港を出港、一路内地へ向い、宇品港に到着しました。七月四日、東京近衛歩兵第一連隊に転属のため宇品港を出発し、七月七日、近衛歩兵第一連隊に到着、七月八日、召集解除になり同日中に帰省の途につきました。三カ年余りの北支那での

勤務を終えて懐かしの我が家に帰郷することが出来ました。

その後私は応召前に勤務していた九州の八幡製鉄所に職場復帰をしました。約一年三カ月が過ぎたころ、またもや再度臨時召集で西部第三十二部隊に応召しました。

昭和十八年十月十八日付けで第五十五師団衛生隊要員として第二機関銃中隊(丸亀)に編入され、同年十一月二十四日までの約一カ月と六日間、丸亀の第二機関銃中隊で勤務しました。この期間の勤務は伍長ですから当然下士官勤務でした。丸亀第十二連隊に属する機関銃中隊です。

ある日父母が丸亀では初めて面会に来てくれ、母の手作りのお弁当を食べながらの楽しいひと時でした。いつ外地に向け出発するかしれないので……そんな話をするとうちは泣きじゃくっていました。私もいつの間にか目に涙が出ていました。これが親子の最後の別れになるかも知れないという思いが親も子も胸の内にあるからです。しかし

私にとつては楽しい楽しい時間でした。面会には時間の限度がありますので、やがて父母と別れ私には中隊に帰りました。今も当時の思い出が頭の中にこびりついています。

約一カ月余りの丸亀での勤務でしたが、日曜日には自由外出も許可されて高松や琴平方面によく遊びに行きました。それから昭和十八年十月十八日、入隊以来約一カ月余りになりました。いよいよ外地に向け出発の命令が出ました。

十一月二十四日、ビルマ方面に向かつて宇品港を出港、途中、台湾、香港に寄港しましたが上陸は許可されませんでした。海上の波は高く、私たちが初めて体験した荒波でした。船酔いして「げえ、げえ」いいながらです。食事をもらいに行くことを「飯し上げ」といい、その合図でもらいに行きます。甲板の上は船の上下左右の揺れがひどく、片手はいつも何かを握っていないければとても歩けません。片手に食事用のバケツを下げて歩きますが、分隊に持って帰っても半数の人は食事はいらぬとい

って食べないのです。食べると吐いて苦しいからです。私は当初思ったより元気で食事も三度、三度食べて、苦しそうな人達を世話しました。

当時私は伍長ですから分隊長として兵員十六人の部下を持っておりました。輸送船は宇品港を出発してから二十四日間が過ぎた昭和十八年十二月十八日、バンコクに到着しました。上陸したここも初めて見る異国の地でした。驚きです。住民の姿、黒い顔、南国らしい立木、それにバナナ等珍しい物ばかりでした。やがてトラックで一時間ばかりの輸送で民家らしい集落に着きました。ここで今夜は宿営することでした。

住民達が珍しそうに大勢集まって来ていました。そして私達にバナナやパイヤ、パイナップル、マンゴー等をたくさん持って来て、私達の持っているタバコ、シャツ、腕時計などと物々交換してくれといっているのです。言葉は通じませんがジェスチャーでよく分かりました。

毎日一回は部隊本部へ命令受領に行くのですが、

その日の命令では、ここで三泊の休養をとり、タイとビルマ国境タイメン山脈を行軍で通過する予定とのことでした。一日に約六里（二十四キロ）で、三日間はしっかりと休養しておくようにとのことでした。

その三日間もいつの間にか終わり、いよいよ出発となりました。昼間は歩いて夜はテントを張って宿営です。食事は飯盒炊飯で炊いて食べるのです。毎日毎日、来る日も来る日も、みんな一生懸命で歩きました。初めて通る山道、昼までも野生の鶏が私達のそばまで来て死んでいました。私達が内地で見たこともない鳥もいました。

いつのまにかバンコク上陸以来十二日間が過ぎて、昭和十九年一月一日付けで陸軍軍曹に昇格しました。それから毎日の行軍は続き二十日間ぐらいを過ぎますと熱を出す人、足を痛めて歩けない人、体調をこわす人が出て部隊は思うように行動が出来なくなりました。その都度予定を変更しました。だが私達の部隊はただひたすら歩きました。

た。そして目的地も近いことを感じました。

とうとう目的地ビルマ国に到着することが出来ました。そして昭和十九年一月二十日付けで第五十五師団衛生隊に転属を命ぜられました。これからはトラックで行動することになりました。毎日毎日、目的地に向かってビルマ国内を走り続けました。そして首都ラングーンを経てトラック行軍も終わりの日が近付いてきました。前方に連なる大きな深い山脈がだんだんと目の前に迫り、もう二キロか三キロまで近づいたその時でした。集団を狙ってものすごい音で砲弾が飛んできて、トラック周辺に何発か落ちました。その度にもものすごい地煙りが立ち、砲弾の破片がピュンピュンと音を立てて飛び散っていました。

私達は無我夢中でトラックから飛び降りて、近くのジャングルの中に小さくなって伏せました。

その後も数十発の砲弾が撃ち込まれましたが私達は無事でした。やがて静かになり私は分隊を掌握して異状の有無を小隊長に報告しました。最前線

を目の前にしたこの山脈がインドとビルマの国境であるインメニ山脈でした。インド軍がこの山を攻撃してビルマに侵入せんとするのを阻止するのが、私たち第五十五師団の任務でした。

いよいよ前線に来たことを強く感じました。そして私たちの部隊は山の奥へと進んで行きました。所定の位置に到着して命令受領がありました。その山は私たちの分隊が最前線で歩兵部隊の負傷した兵員を第一野戦病院まで護送するのが任務でした。

野戦病院といってもキャンプを張った簡単な病院で、応急的に手当てをする程度の粗末なものでした。それからは毎日その任務に励みました。食事は二日間で一食だけ飯盒で炊いて食べました。そのほかの食事は全員が生米をかじるのです。飯盒で炊くのも缶詰の携帯燃料です。これは煙が全く出ないのです。煙が出ますと我が部隊の所在が敵に知られて飛行機と砲弾でたたかれますので煙はできません。

この携帯燃料にも限度があります。私たちがこの山脈に来てからは後方からの兵器及び物資の補給や輸送は全くありませんので、これ等が無くなれば自滅するばかりです。上空には一日中飛行機の絶え間はありませんでしたが、日本軍の飛行機は一機も見えませんが、この状態はもはや日本軍の敗戦が近いことを物語っていたことを後日知りました。

このような状態で毎日戦っていた日本軍は、夜間のみの攻撃で、昼間明るい時は攻撃ができなくなりました。敵に位置を知られるのですから夜間の行動のみでした。私たちの分隊は毎夜のごとく負傷兵を護送しておりました。中には重傷者も沢山おりました。タンカの前後をロープでがんじがらめに縛りつけて、これを引張りながら山を登ったり下ったり、立木の間をくぐったり、数時間かかって護送しました。途中不幸にして死亡する人もおり、本当にお気の毒に思っております。このような戦が毎日続けられる中、私の分隊も一人で

数人を護送するほど、負傷者が多く出るようになりました。

実は私たちがこの戦闘に参加する直前のことですが、この前線で「キ号作戦」といって大きな激しい作戦が開されたそうです。最初に日本軍が敵軍を包囲して、もう袋のねずみも同然、勝利は手中にありと思つた時には、日本軍はその外側を敵に完全に包囲されていたのでした。三重丸の中に日本軍がはさまれて大損害を受け、この作戦で日本軍は何万という兵力を失つたそうです。私の弟もこの作戦で戦死しました。当時中隊長の当番兵をしていたそうで、後日この中隊長にお会いして当時の事情を話してもらいました。そして後日帰省して両親に当時のことを詳しく話しました。

「キ号作戦」で何万という兵力を失つて、その補充に私たちが、この度はるばると内地から来たということでした。私たちのこの第五十五師団といえ、日本軍の中でも優秀な師団であつたそうで、四国で編成の師団です。その第五十五師団が

このインメン山脈を死守しているのです。この山の向こう側つまりインドの山麓にはインドで有名なチッタゴン飛行場があり、この飛行場を敵軍は死守しているそうです。この山脈での日本軍の戦いはそれぞれ大変な戦いで、そのために犠牲者も大変多かつたのです。

思えば毎日生米をかじりながら生活を続けていけるのはなぜか、精神力以外には何もありません。人間はその場その場に応じて、人それぞれに我慢して何事にも耐えていく、この偉大な力を身を持って体験できました。何事にも我慢と耐える力と精神力、これはいつの世でも通用する、金銭では得ることの出来ない尊いものではないでしょうか。このように毎日必死で任務についているある日、敵の飛行機から沢山のビラを日本軍が潜んでいると思われる場所に大量に撒いたのでした。私たちの部隊はこのビラをみんなが拾って読みました。ビラを読んでみんな驚きました。「天皇陛下が八月十五日無条件降伏をした」と書いてありました。

だから日本軍は一人残らず全員投降せよというの  
でした。

はじめはとても信じられませんでした。みんな  
「こんな宣伝に迷わされてはだめだ」といつてお  
りましたが、それから度々ビラは撒かれました。  
そのようなことが続いているある日、部隊命令が  
出ました。日本が無条件降伏をしたことは事実で  
した。

その後私たちの部隊は山深き山中を、夜間のみ  
行軍して行きました。そして「ビルマを脱出して  
後方の安全な場所に後退する」との命令を受けま  
した。「なお住民の部落に近づくことは禁止する。  
もし住民に発見されると敵に通報されて部隊全員  
が捕虜になるから」ともいわれました。そして「今  
後は他人に迷惑を及ぼす場合は潔く自決せよ。自  
決用として手榴弾二個を支給する」という命令で  
した。

その夜から早速行動は開始されました。昼間明  
るい時間はその場で思い思いに休むのです。夜に

なると行動を起し、夜が明けるまで行軍は続きま  
す。前の人を見失わないように必死で歩きました。

ビルマの気候は一年が二期に分れていて、半年  
は雨期で半年は乾期です。当時は雨期でした。日  
本の梅雨期と同じでじぼじぼと雨がよく降るので  
す。当時履いていた靴は破れて履けなくなり捨て  
ましたので毎日裸足でした。靴も服も内地を出発  
の時に支給されたままですから着のみそのままで  
す。雨には濡れ通しで、しかも裸足で初めて通る  
山道を毎日毎日必死の思いで歩きました。食事は  
相変わらず生米をかじりながら頑張りました。

何といっても夜の暗い初めての山道ですから前  
の人を見失ったら大変です、方向も見当がつきま  
せん。何度も何度も足を滑らせて転びました。足  
に生傷の絶え間はありません。落伍したらもう終  
わりです。毎日の雨のため頭からずぶ濡れです。  
滴が背中を流れるのを感じます。小雨が止んでい  
る時は体温で温まって服が乾きます。こんな毎日  
をおかげで元気で行動できました。

しかし一カ月が過ぎて、分隊からも部下を一人失いました。高熱を出して無理をしながら行動を共にして助け合っていたのですが、とうとう途中で倒れて歩くことも不可能になり、本人も諦めてとうとう自爆しました。本当に気の毒ではあったのですが一人一人自分の体を守っていくのが限界で、とても人を助ける余裕はありません。だから他人に迷惑をかける場合は潔く自決せよという命令でした。私の分隊だけではありません。もう大勢の人が失われました。毎日毎日、無我夢中で必死で部隊に取り残されないように行動しました。

早くも二カ月の月日が流れました。戦友との悲しい別れのなか、こうして平野を歩き、ジャングルに到着した私たちはこの平野の途中で分隊の兵士をまた一人失いました。この兵士は私の当番兵で私の面倒をよくみてくれていました。以前から体調をこわしていたのですが、よく頑張ってきた。だが彼も体力の限界でした。気の毒でたまらなかつたけれど、もうこれ以上彼を引っ張って

行くことは無理だと、私もついに決断しました。本人の言うとおりにしようと思つて彼にそのことを話しました。そして彼の願いを許可しました。

彼は私に言いました「分隊長殿、私の最後を見届けて下さい。そして中隊長に報告して下さい」と言い残して潔く持っていた手榴弾で自爆しました。私は彼の最期を見届けて、部隊の方向へ暗闇の中を一生懸命で走りました。

部隊に百メートルも遅れると真暗闇の中では見失つてしまいます。このような平野では部隊の方向を見出すには良い方法があるのです。地面に顔をすりつけてしばらく耳を澄ませて音を聞きます。すると微かに音が聞えます、そうすれば方向が定まります。

やがて私は部隊に合流して中隊長にこのことを報告しました。「負傷にせよ病気にせよ、他人に迷惑を及ぼす場合は潔く自決せよ」との命令ではあったが、分隊長の戦友が目前で最期を遂げる姿を確認する、その時の私の気持ちは言葉ではとても

表現できません。

こうして私たちの部隊はジャングルに到着してからも休むことなく、後方へ後方へと行軍は続きました。今度は夜間も昼間も通して歩きました。途中で小休止を取りながら歩きました。もう分隊の兵士たちも疲れてきました、体力の限界です。それから三日ぐらい歩いたころ、とうとう目的地である安全の地に到着したのです。

今度は何とびつくりしました、驚きでした。そこには日本軍が沢山おりました。私たち第五十五師団を迎えるために約一個連隊の兵士がキャンプを張り敵の攻撃に備えて陣地を作っていました。つまり私たち第五十五師団を無事に後退させるため命令を受けて援護に来ていたのです、安心しました、とてもとてもうれしかったです。もうこれで大丈夫だと思う気持ちがありました。

ここでは温かい湯茶、そして温かいくず湯、かたくり粉、温かい白いご飯、思っても見なかった、この持て成しに私たちは大喜びでした。そして食

べました、飲みました、腹いっぱい御馳走になりました。思えばあの敵さんのビラを読んで以来、後退の行動を起して約二カ月半もの長い間、生米をかじりながら、足は裸足で着のみ着のまま、雨に濡れながらの行動でした。とても人間のなす技とは思えません。今こうして現在があるのが不思議なくらいです。まさに神仏のおかげでなくて何でありましょうか、と思いつつマラリアの熱とも戦いながらの行動でした。けれどもどうにもならない時は最後はこの持っている手榴弾があるから心配ないと思った、そんなことを自分に言い聞かせたのも度々でした。

しかし楽しい時間もそして喜びもここまででした。ついに運命の時がやってきました。その夜遅く私は四〇・五度と言う高熱を出した。従軍以来初めての高熱でした。そして私はとうとう意識不明になりました。その後私が意識を回復したのはまる二昼夜過ぎた日のことでした。

突然、私が意識を回復しますと、目の前はボウ

―と霞んで、時間が立つにつれてだんだんしつかりして我に帰りました。見ると私はタンカーの上に寝ていることに気が付き、そして部下が二人側にいるのです。部下に声をかけると「分隊長」といって泣きながら私の手を二人がしっかりと握ってくれました。そして一人が軍医を呼んできますと言って行きました。やがて軍医さんが来てくれて熱を計ったり脈を見たり、そして私の瞳を凝らして見ていた軍医さんは言いました。「熱は三七・五度あるがもう大丈夫だ。井上軍曹と同じ病人が重症で三人来たが二人は死亡した。三人目の井上軍曹はもう殺しはせん。大丈夫、俺に任せておけ」との力強い言葉でした。その後、部下や軍医さんのお陰で五日間ほどでどうにか一人で枕にすがってトイレに行けるようになりました。部下の二人は軍医さんの許可をもらい、その目を最後に別れを惜しんで分隊に帰って行きました。

私はこの日で部隊と別々になったのですが、軍医さんから「どうだ大分元気になったようだが、

もうトラックに乗っても大丈夫かなあ」というので「あまり長時間でなければ、大丈夫だと思います」といいますと「ああそうか、いや実はこの後方四十キロの所にアメリカ軍の開設している大きな赤十字病院で養生してもらおうと思つてなあ」といわれました。「いや心配することはない。この病院は国際赤十字法に基づいて開設しておる大きな病院だから設備も良いし、それに温泉もあるんだ。あの病院でゆっくりと養生してマラリアを完全に直して内地へ帰った方が良いと思うからなあ。

それから「明後日朝出発するから心の準備をしておくように」といわれて軍医さんと別れる当日軍医さんも同行してくれました。病院に着くと軍医さんは「手続をしてくるからしばらくこの付近で待つてくれ」といつて軍医さんは何度も来たことがあるらしく馴れた様子でした。そして「すべて手続は終わった。では我々は帰るが病院の指示に従い養生して一日も早く元気になってくれよ。今度会う時はお互いに日本の地で会いたいもの

だ」といって私の手を固く握ってくれた軍医さんはトラックに乗り出発しました。

それから九カ月余り、病院生活は本当にお世話になりました。いよいよ最も思い出に残る私の生涯のページでありました。そして内地に帰れる日がやって来ました。昭和二十一年六月二十八日、モールメン港を出港して一路内地へ向かったのです。途中でどこへも寄らず大竹港に到着、同日上陸しました。そして二日後の七月十六日召集解除になり、七月二十六日に帰宅しました。